



ハーレム ドラゴン

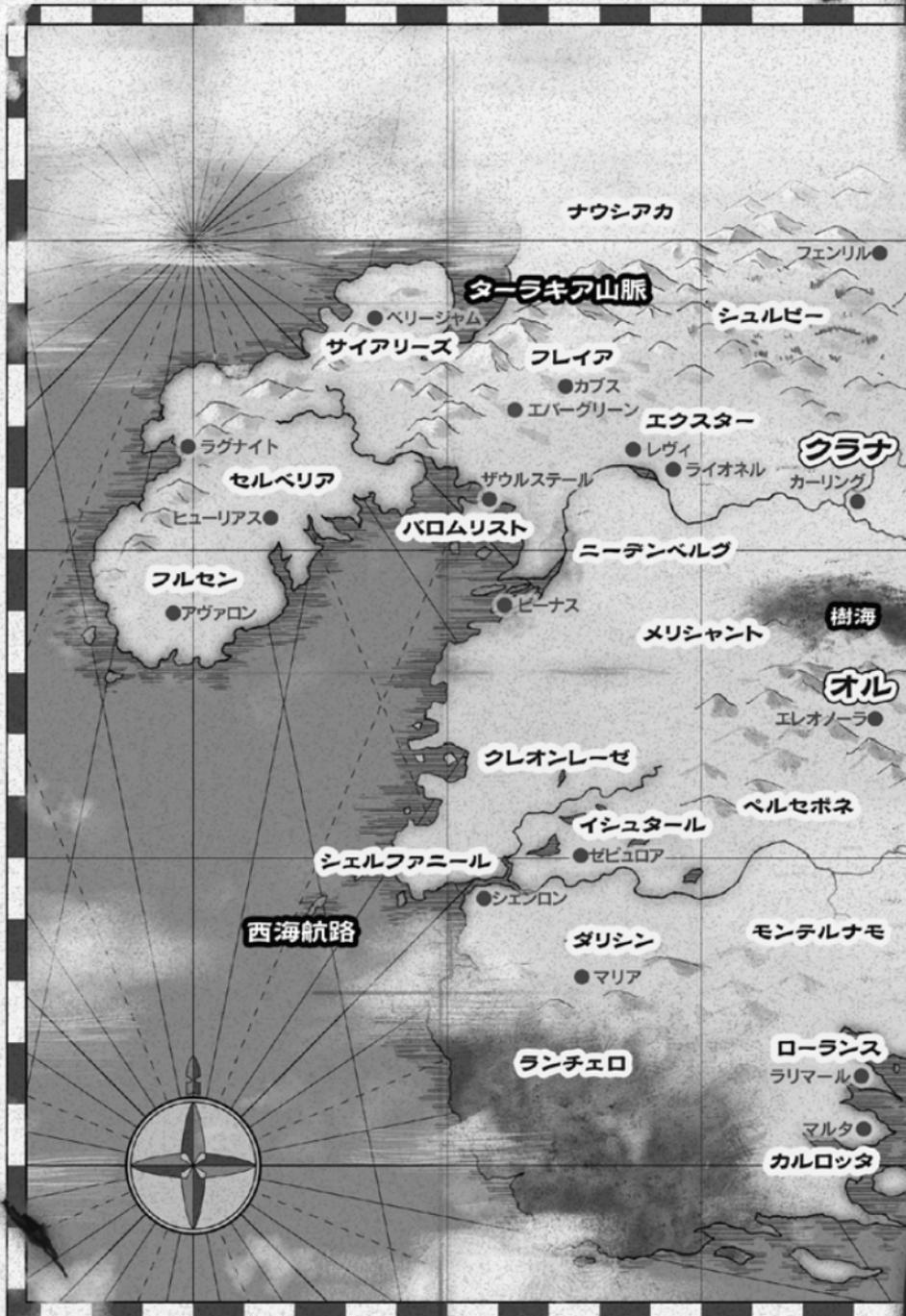
Harem Dragon

小説 竹内けん 挿絵 あーや

立ち読み版

ハーレムシリーズの世界





ナウシアカ

フェンリル

ターラキア山脈

シュルビー

サイアリス

フレイア

●カブス

●エバグリーン

エクスター

●ラグナイト

セルベリア

ザウルステール

●レヴィ

●ライオネル

クラナ

カーリング

ヒューリアス

バロムリスト

ニーデンベルグ

フルセン

●アヴァロン

●フィーナス

メリシャント

樹海

オル

●エレオノーラ

クレオンレーゼ

ベルセボネ

イシュタール

●ゼビュロア

シエルフアニール

●シェンロン

ダリシン

モンテルナモ

●マリヤ

ランチェロ

ローランス

●ラリマール

●マルタ

カルロッタ

西海航路

登場人物紹介

Characters



エメロード

現ドモス王国でもっとも優れた飛龍
乗りと目されている女騎士。



デイジイ

いつもロシェの遊びに付き合っ
ている学友で、明るくて元気な娘。



ミリー

ディジィとともにロシェと遊んでいる学友。いつもお菓子を啜えている。

ジャクリーン

都会からやってきたロシェの家庭教師。インテリ系の美人。



ロシェ

ドモス国王ロレントとナジャの息子。
一人前の飛龍乗りを夢見ている。

第一章	ドラゴンベイビー
第二章	ドラゴンブレス
第三章	ドラゴンランス
第四章	ドラゴンクロウ
第五章	ドラゴンパワー
第六章	ドラゴンハート

凛々しくも美しい巨乳お姉様の胸の谷間に顔を埋め、その乳房を思いつきり揉みしだきたいという、欲求と戦いながら、その背を両手でしっかりと抱く。

同時に密着する下半身の、崩壊する予兆と必死に戦う。

「さて、殿下。地上に降りましたよ。そろそろ腕を離してはくれませんか？」
思いつきり抱きついていたらロシエに、エメロードは苦笑しながら促す。

「ああ……」

飛龍の背に乗って、怖がっていた、と思われるのも恥ずかしい。ロシエは慌てて両腕を解いた。

同時に大変心残りではあるが、ふわふわの乳房の谷間から顔を離す。

そして、飛龍から飛び降りる。

「あ」

ロシエの下半身はフラフラと震えて、その場に尻餅をつく。

「うふふ、さすがの殿下も腰が抜けましたか」

優しく笑ったエメロードは、颯爽と飛龍から降り立った。

先ほどまでは密着しすぎていたから、エメロードの服装はわからなかったが、改めて見ると、なかなかとんでもない格好だ。

金色の飾りのついた黒革のブラジャーと、過激極まる紐パン。そして、太腿の半ばまでのロングブーツ。

さすがはデイジイが憧れて、真似をしている本家といったところだろう。

ただしデイジイと違って、左右に張った肩、満々と張りつめた乳房、きゅつと引き締まった腹部、そして、左右に張った臀部、といった極めて女性的な凹凸に恵まれたナイスバディである。

露出の激しいビキニスタイルが実によく似合う。

ワイルドビューティーなお姉様だ。

「さて、両手を出してください。魔法治療して差し上げます」

命じられたロシエは、素直に両掌を差し出す。飛龍の背に必死にしがみついていた両手は、赤剥けて血だらけである。

「まったく、無茶をする」

呆れながらもエメロードは、魔法宝珠を翳して治療してくれた。

「ありがとう」

「いえ、どういたしまして。他に痛いところがありますか？」

「ああ、もう、いい」

ロシエは視線を泳がせながら答えた。

不意にエメロードのクールな顔立ちに、なんともいえない茶目つけたつぷりな笑みが浮かんだ。

「先ほどから拝見するに、腰でも打たれたのではありませんか？」

「いや、これは……違う」

「遠慮は無用です」

腰が抜けたまま逃げようとするロシエに、エメロードは襲いかかった。

いくらロシエが恵まれた体躯をしていようと、所詮は初陣も済ましていない少年。一方のエメロードは、現役バリバリの女騎士である。

その勝敗は明らかであった。

抵抗むなしく、あつという間に、ズボンとパンツを引きずり脱がされる。

「あ、やめて……」

ロシエはさながら、強姦される直前の乙女のような弱々しい悲鳴を上げてしまった。もし、ディジーやミリーが聞いていたなら、耳を疑ったであろう。

エメロードのほうはさらに容赦なく、少年の両足を持って、大開脚させてしまう。

「うふふ♪」

瞳を輝かせるエメロードの見下ろした先では、ぶるんと逸物が跳ね上がった。

プルプル震えながら勃起している逸物は、小枝と例えるに相應しい頼りない代物である。先端まできっちり皮に包まれているどころか、勃起しているのにまだなお先端にたつぷりと皮が余っていた。

しかも、先端からは透明な液体がタラタラと流れ出し、全体を濡れ輝かせている。

「な、何がおかしい……」

エメロードの微笑にいささか傷付いたロシエは、ムツとする。

「可愛らしい、と思っただけです」

「子供扱いするな！」

「お子様ですよ。身の丈を考えず、なんの準備もせずいきなり野生の飛龍を捕らえにくく無謀ぶり、そして、この皮のたつぷり余った可愛らしいおちんちんが証明しています」
少年の怒気を軽く流したエメロードは、右手を伸ばすとその濡れ輝く逸物を掴んだ。

「ああ……」

ぶるつと震えてロシエは大きくのけぞる。

悶える少年の前に、エメロードの瞳は榮しげに輝く。

「もしかして、こういうことをされるのは初めてですか？」

「う、うん……」

初恋相手のお姉様に、勃起した逸物を驚掴みにされた童貞少年は、もう借りてきた猫も同じであった。

「うふふ、ヤンチャな王子様だと聞いていましたけど、意外と奥手なんですね」

すっかり大人しくなってしまったロシエの前に、舌舐めずりをしたエメロードは、手にした逸物をニギニギと揉み込む。

「まだ小さいけど、カッチカチの石みたい。それにドクンドクンと脈打っている。あは、すごい。さすがはロシエ殿下ですね。美味しそうなおちんちんです」

凛々しくもかっこいいと思っていたお姉様の卑猥な本性にロシエは怯え、そして悶えた。

「あ、ダメ、やめて……」

「あはっ、そんなに我慢しなくてもいいですよ。気持ちよくイってください」

優しくそれでいて卑猥に囁いたエメロードは、筒状にした手を上下に動かし始めた。包皮の中で、亀頭部の輪郭部分を刺激される。

「ひい〜」

初恋のお姉様に逸物を悪戯された童貞少年は、なすすべもなく陥落した。
プシヤッ！

包皮の狭間から、まずは飛沫が上がった。次いで間欠泉が噴出する。

ドクンッ！ ドクンッ！ ドクンッ！

白い濃厚な液体が、豊麗な乳房から引き締まった腹部に浴びさせられた。

「あ、熱い。それにすごい量……」

恍惚とした吐息を漏らしたエメロードに、半泣き状態のロシエは謝罪した。

「ごめん……」

「ん？ 何を謝っておられるのですか」

「その……おしっこ浴びせちゃって」

しよげ返ったロシエの謝罪を受けて、エメロードは苦笑する。

「殿下、こういう白いおしっこ出したの、初めてですか？」



「うん」

ロシエの素直な答えに、エメロードは震える。

「まさかとは思っていたけど、ロシエ殿下の初絞りに立ち会える栄誉に浴せるだなんて……なんという幸運なのでしょう」

恍惚となったエメロードは、自らの胸元にかかった液体を指で掬って、美味しそうに肉厚な唇に含んだ。

「ああ、ゼリー状。こんなに濃くて青臭いものを入れられたら、牝の飛龍だって妊娠しちゃういそいですね」

「……」

エメロードの冗談に付き合う余裕はない。茫然としているロシエに、淫らなお姉様は一方的に話しかける。

「殿下は龍の繁殖を見たことはありませんか？ あれと同じですよ。殿下の子種は最上級の種龍と同じ。それを浴びせられて喜ばぬ女はいませんよ」

そこで一旦言葉を切ったエメロードは、物欲しげに半萎え状態の逸物を見下ろす。

「このままあたくしが、童貞を食ったら、ナジャ様にぶつ殺されちゃうかしら？ でも、こういうのは早い者勝ちだし」

惚けているロシエに覆いかぶさるようにしながら、エメロードの両手が、左右の腰骨にかかった紐パンにかかったときである。

遠くから馬蹄の音とともに、少女たちの甲高い声が聞こえてきた。

「ロシエ、無事か？」

「生きている？」

デイジイとミリーが馬を駆けさせ近づいてくる。

どうやら、ロシエが、エメロードに助けられたのを遠くから見ているのだろう。

大急ぎで駆けつけてきたようだ。

「あら、残念。時間切れ」

軽く溜息をついたエメロードは紐パンから手を離した。そして、手早くロシエの身支度を整えてやる。

「初穂は食えなかつたけど、初絞りは味わえたんだ。文句を言ったら罰があたりますね」
凜々しくもエロいお姉様。そんなところが、まさにドモスの女である。

最初は爪先で軽く突つつく。

「そういうば知ってる？ 男ってこのおちんちんを、オマ○コに入れたがるんだって」

「ああ、そうらしい。このちつこいのだったら、まあ、入れられるかなあ」

ディジイも、ミリーも次第に慣れてきて、小さな逸物を弄ぶ脚使いも大胆になっていく。
フミフミ……。

少女たちの生足が、熟睡しているロシエの逸物を甘踏みした。

「お、硬くなってきた」

「おお、一気に大きくなった」

驚愕する少女たちの足の下、逸物が勃起するのと前後して、ロシエが覚醒する。

「うゝむ……、って！ おまえら、何やっているんだ!!」

寝起きと同時に、薄い暗闇の中、自分を見下ろす形でディジイとミリーが並んで立つ光景が目に入る。

それだけで十分に驚愕する事態だというのに、彼女たちの足が、自分の逸物を踏みつけているのだ。

ディジイは得意げに応じる。

「えへへえ……ロシエ、これやられるの好きみたいだから、やってあげているのよ」

「出血大サービス」

クールに応じたミリーは、リズミカルに逸物を踏み込む。

「ちよ、ちよつと待て、何考えているんだ！」

「ロシエ、あのオバサンにここ足で踏まれて喜んでいたじゃん」

「遠慮は無用」

顔を赤く火照らせたデイジィとミリーは、いきり立つ逸物を無我夢中で踏みにじる。

「あが、あがが……」

熟睡しているところを、いきなり電気按摩で起こされたのだ。

少年はまともに動くことができず、意味不明な嬌声を漏らすことしかできない。

「うふふ♪」

少年の逸物を踏みにじるといいうタブーに興奮しているのだろう。少女たちの目は油でも差したかのように爛々と輝く。

不意に少女たちの踵が落ちた。

グギ！

「うおおおおおおお!!!」

左右の金玉を、少女たちの踵で踏み潰されてれたロシエは、少女たちを払いのけると、両手で股間を押さえて蹲うすくまった。

全身から脂汗が出て、吐気までする。

振り払われて寝台の上に尻餅をついてしまったデイジィ、ミリーも、さすがに心配顔になる。

「ど、どうしたの？」

「だ、大丈夫……」

亀のように蹲っていたロシエは、やがて地の底から噴き出すような、毒々しい声を絞り出す。

「おまえら、俺になんの恨みがあるんだ……」

なんかヤバイことをした、といまさらながら悟ったデイジイが、慌てて作り笑顔を浮かべながら言い訳する。

「ロシエ、あのオバサンにおちんちん踏まれて踏まれていたじゃない。だから、あたしたちもやってみようかって♪」

「ジャクリーンは足で肉棒を優しく扱いてくれたんだよ。おまえら、思いつき金玉踏みつぶしたろ。金玉を踏み潰されたら、男は死ぬぞ」

涙目になりながら叫ぶロシエが本気で怒っている、と察したデイジイは慌てる。

「え、そ、そうなの……、ごめん」

「いいから出てけ！」

なんとか苦悶から立ち直ったロシエは、身を起こすと部屋の入り口を指し示す。

それを受けてデイジイは半泣きになる。

「だから、ごめんって、そんなに怒らないでよ」

「悪気はなかったんだよ。ほんと……」

肩を落としたミリーもしゅんつとしながら謝る。

「うるせえ、俺は眠いんだよ」

安眠を台無しにされたロシエが邪険に應じると、突如デイジイは大口を開けて泣き出した。

「びいえ〜〜ん！ ロシエ、あたしのこと嫌いになっちゃったんだあ〜」

「つておい、なにも泣くことないだろ」

戸惑うロシエに、ミリーも半べそになりながら応じる。

「ぐす、ごめん。謝罪といつてはなんだけど、ロシエが舐めたいなら、うちのオマ○コ舐めてもいいから」

「あ、うん、あたしも。ロシエが座って欲しいなら、あたしだってロシエの顔に座るよ」
普段は男勝り、その辺の男など平気でぶっ飛ばすような少女たちが大泣きしながら謝罪してくるのだ。

毒気を抜かれたロシエは、戸惑った表情で頬を掻く。

「おまえらの言い分を聞いてみると、俺すげえ、変態みたいなんだけど……」

胡坐あくらをかいたロシエのぼやきに、身を乗り出したデイジイが反発する。

「変態じゃん。あんなヒステリーオバサンの汚いオマ○コを美味しそうに舐めちゃってさ」

「いや、確かに腹黒そうな女だけど、意外にオマ○コ綺麗なんだぜ。綺麗なピンク色をしてるんだ」

「おま○こっっておしっこが出るところだよ。綺麗なはずない」

並んで身を乗り出したミリーも決めつけてくる。

人が寝ているところに押しかけてきて、ダブル電気按摩で叩き起こしたと思つたら、泣き出し、最後にはグダグダグダグダと愚痴である。

(女って面倒臭いなあ)

内心で溜息をついたロシエだが、左右の少女たちを前にどう慰めていいものか、頭をひねる。

ほとんど本能的に手を伸ばすと、人差し指で少女たちの目元の涙を拭ってやる。

そして、何の気なしにデイジイの唇を奪った。

ツルンと柔らかかった。

「っ!？」

泣いていたデイジイは目を見開いて硬直する。その間にロシエは、左側のミリーの唇も奪った。

「っ!？」

こちらは若干、肉厚が薄い感じがする。

茫然とした顔で、硬直している少女たちに、ロシエは面倒臭げに応じる。

「これで満足か。俺は別におまえらのこと嫌いになつたわけじゃないぞ。おまえらのほうが、俺を避けたんだろうが……満足したなら、さっさと帰って寝ろ」

ロシエの言葉とは裏腹に、少女たちは顔をパァッと輝かせると、左右からロシエの肩を掴んで揺する。

「あたしのこと、嫌いじゃない」

「ああ」

無然とした顔で応じるロシエに、ミリーも確認してくる。

「うちのこととは？」

「嫌いじゃない」

ディジィとミリーに交互に懇願されて、ロシエはうんざりした顔で応じる。

「しかし、寝ているところをいきなり金玉踏み潰されて起こされた俺は、怒っている」

そう宣言したロシエはその場にすつくと立ち上がった。そして、股を広げて、腕組みして仁王立ちした。

「お詫びとして、俺のおちんちんを舐めたら許してやる」

「えっ!!」

ブランブランしている逸物を前に、さすがの暴走少女たちも、若干、引き気味の表情になる。

しかし、ややあつてミリーが頷く。

「え、あ……うん、いいよ」

「あたしも、ロシエのおちんちんなら舐めてみたい」

「よし、なら舐めろ」

その足下に膝立ちになった少女たちは、恐る恐るロシエの股間へと顔を近づけた。みるみるうちに、逸物が臍に届かんばかりに反り返った。その光景に少女たちは目を見張った。

ミリーがやや畏怖したような声を出す。

「す、すごい、でかくなつた」

「なんか、カッコイイ」

デイジイのほうは目をキラキラさせている。

「これ、舐めていいの？」

「ああ、おまえら二人で左右から舐めな」

ふんぞり返ったロシエの命令に従って、デイジイとミリーは、口を開き、ピンク色の舌を出した。そして、肉袋の上から玉袋を舐めてくる。

「くっ」

ロシエは思わず身悶えた。

睾丸自体は、それほど敏感な性感帯ではない。しかし、幼馴染みの少女たちに、舐められていたという事実が、予想以上に精神的な昂りたかぶをもたらす。

「ふう、ふう……ふう……」

戸惑いながら見下ろしていると、少女たちは湿った熱い吐息を吐きながら、一生懸命に

睾丸を舐め弾いている。

(ミリーの舌使いのほうが大胆というか、よく動くな。いつも鉛を舐めているから、舌先が器用なのか?)

ジャクリーンやエメロードに悪戯されていたときは、一方的に弄ばれている、というか、受け身で遊ばれている感じであった。

しかし、現在、ディジイやミリーに逸物を差し出しているのは、舐めさせるためなのだ。同じことをやっているのに、心情的にはまるで別物だった。

主導権をすべて自分が握っているわけであり、まるで「大人の男」になったような気分になれる。

「ねえ、ロシエ。気持ちいい？」

右の玉を舐めているディジイからの質問に、ロシエは躊躇いながら頷く。

「ああ」

「それじゃ、うちの舌は？」

「うむ、気持ちいい」

普段はクールぶっている少女も火照った顔で見上げてくる。

そのさまを見下ろしてロシエの心は高鳴った。

(な、何こいつら、おちんちん舐めながら、媚びた顔しているの？　なんか妙に色っぽいんだけど……)

生まれたときからいままで、毎日、飽きるほどに見ている幼馴染みたちの顔だ。

いままでディジイとミリーの二人を、色っぽいなどと感じたことはなかった。

いつも一緒につるんでいたのは、あくまでも友人だからだ。他意はない。

それが頬を紅潮させ、恥じらいの浮かんだ表情で、チラチラと上目遣いに見上げながら、一生懸命に舌を動かしているのだ。

單純に左右の金玉を、舐められるという肉体的な快感以上の喜びが、ロシエの体内を熱くさせる。

(やべえ、こいつらの舌。ほんとにすげえ気持ちいい！)

ロシエとしては、ジャクリーンとのかなりみつともない密事を見られて、男を下げてしまった、という思いがある。

だから、ここは男らしく振る舞おうと思った。

すなわち、「俺はおまえらみたいな色気もおっぱいもない小娘たちになんか、全然興味ないんだぞ。おまえらがちんちんをどうしても舐めたいって言うから、仕方なく舐めさせてやっているんだぞ」という尊大な態度でいたかった。

しかし、愛らしい顔をした少女たちが、ペロリペロリと金玉を舐めているさまを見ると、身悶えるほどに気持ちいい。

(しかも、改めて見るとこいつら、結構、可愛いよな)

二人に対して、可愛い、と思ってしまうことが、なんだか負けのような気がして、悔し

い。

しかし、もう我慢が利かない。思わず両手を伸ばすと、オレンジ色のサラサラヘアと、赤毛のポニーテールの頭髪を撫でながら促す。

「玉だけじゃなくて、棒のところも左右から舐め上げてこいよ」

「うん、いいよ」

ロシエの指示に従って、二人は仲良く肉棒の左右から舐め上げてくる。

息の合った二人は顔を横にすると、肉棒を横啜えにした。

ジュル、ジュルジュル……。

(な、なかなか上手いじゃないか……くう)

さすがに幼馴染みだけあって、どこを責められたときに、ロシエが感じているのか、瞬時に見抜いているようだ。

ロシエの逸物は、エメロードによって初剥きされて以来、勃起すると亀頭部のかなりのところが露出する。

この赤剥けた亀頭部を少女たちはディープキスをするようにして口に挟むと、濡れた小さな舌をチロチロと動かす。

(こいつらのオマ○コってどうなっているのかな。やっぱちんぼいれると気持ちいいのかなあ)

家庭教師ジャクリーンに性的玩具にされて久しいロシエだが、本当にセックスしたのは、

エメロードとの一回だけだ。

ジャクリーンはフェラチオ、手コキ足コキなどを駆使して、ロシエを何度も射精に導くが、本番はやらない。

毎日、一発以上は必ず抜いてもらっているわけで、欲求不満というものは感じないのだが、逸物が一度知ってしまった味を忘れられずに疼うずいている。

(やりてえ、こいつらのオマ○コの中にちんぼぶち込んで、思いつきり腰を振り回したい) そんな牡として、極めて健全な欲望が、沸々と胸の奥から湧き上がってきた。

次の瞬間、まだまだ早漏気味、もとい、年齢的に考えて、早漏で当然の逸物は暴発した。「く、くあああああ!!!」

雄叫びとともに、肉棒が激しく痙攣した。

ドビュ！ ドビュ！ ドビュツ!!!

少女たちの口腔に挟まれた逸物は、激しくのたうち、先端から白き小龍を吐き出させる。「キャハッ」

目の前で逸物が爆発したことに、少女たちは驚き意味不明の悲鳴を上げる。奮闘むなしく暴発させたロシエは、その場でこてんと尻餅をついた。

「うわ、すごい飛んだ♪」

「すごい量。これがロシエの精液なんだ……」

デイジィとミリーは、茫然とした顔で、互いの顔を見合わせる。



自慢げなロシエの確認の声に、ディジィとミリーは素直に頷く。

「確かにエロエロで楽しい♪」

「なら、おまえらそれぞれ乳首を口に含め」

「了解」

ロシエの指示に従ったディジィとミリーは、恩師の胸に顔を下ろしていく。

「え、うそ、そんな、左右同時に吸われたら、わたくし、わたくし……だめえええええ!!!」

しかし左右の乳首を、一つずつロシエに吸われる気持ちよさは、ジャクリオンはすでに体感している。

左右同時の相乗効果がいかなるものか想像がつかず、怯えた。

「うふふ、おっぱいから、ロシエの匂いがする」

「うん、ぶっかけられたんだね。この淫乱教師」

毎りの言葉を咬きながら、ディジィが右、ミリーが左の乳首を口に含み、レロレロと舐め回した。

「あ、ダメ、そんな……左右同時だなんて、ああ……いやああああああ!!!」

悩乱の悲鳴を上げるジャクリオンは、スカートに包まれた左右の足をモジモジさせる。

その光景に魅せられたロシエは、不意に手を伸ばすと、スカートを豪快にたくし上げた。中からあらわになったのは細くて長い足。その太腿の半ばまでバイオレット色のストッ

キングが履かれ。それをバイオレット色のガーターベルトで留めている。

シヨーツのまたぐり部分はすでに変色していた。

「ああ……」

少女たちに胸を弄ばれる女家庭教師は、恥じらい足を閉じるが、いまさらである。

いままで何度も、ロシエの顔面に座ってきたのだ。ロシエのほうとて遠慮はなく、左右の腰紐に手をかけると一気に引き抜く。

ツー……と透明な液体が糸を引き、ふさふさの亜麻色の陰毛が逆立つ。

女の陰毛は性的興奮に襲われると、立毛するのだ。そんな女体の秘密を、ロシエはすでに把握している。

慌てず騒がず、両膝の裏に手を当ててM字開脚にすると、陰毛の中に顔を埋めた。

「はひい……♪」

左右の乳首を同性に舐めしゃぶられている状態で、クンニをされたのである。しかも、クンニしているのは、ジャクリーンがいろいろと手ほどきした教え子。

ある意味、ジャクリーンの性感帯を、本人よりも把握している。

「ひい、ひい、ひい……」

とにかくジャクリーンはクリトリスが弱かった。いや、ロシエに顔面騎乗しているうちに、開発されてしまったのだろう。

最初は包茎気味だったのに、いまでは根元までズル剥けになるような卑猥なクリトリス

「うわ、何これ、こいつイキながら、おしっこ漏らしたの!？」

乳首から口を離れたデイジイが茫然と呟く。それをミリーが否定した。

「いや、たぶん、違う」

「じゃ何よ！」

食ってかかる幼馴染みに、ミリーは慎重に応える。

「潮吹きってやつだ」

「あ、聞いたことがある。ど淫乱変態女がやるってやつだ」

「たぶん、そう」

ミリーも見るのは初めてだろうから、自信なさげだ。

ロシエも初めて見た。

女の飛沫が身体中にかかるのも構わず、興味深く観察する。

ジャクリーンの潮吹きはかなりの時間続いたが、やがておさまった。

「しくしく……」

気位の高い女であっただけに、人前で失禁に近い行為というのは精神的ダメージが大きかったのだろう。

ジャクリーンは啜り泣いている。しかし、誰も同情しない。

「うわ、エロっ!？」

デイジイが息を飲む。

被虐美というのだろう。子供たちの玩具にされて、プライドをズタズタにされて啜り泣く大人の美女は、匂い立つような色香を撒き散らしている。

ロシエはたまらなくなつた。

「入れる！」

宣言すると同時に、ロシエは立ち上がり、ジャクリーンの両足を上げて、腰を高く掲げさせた。

いわゆるマンガリ返しの姿勢にする。

エメロード、デイジイ、ミリーと経験を積んできたロシエはお手の物だ。

事態を察したジャクリーンは、我に返って必死に叫ぶ。

「お、お待ちください！」

「今日は絶対に入れるからな。おまえの中に、俺のおちんちんぶち込むんだ」

ロシエの宣言にジャクリーンは、困つたように目を左右に泳がせながらも、なんとか口を開く。

「いえ、殿下がやりたいと言うのなら、わたくしは構わないですが、お約束ください。勉強はしっかりすると」

その主張に傍らで見ていたデイジイが、感心顔で頷く。

「しかし、先生もすごいよね。ロシエに勉強させようという、その執念には正直感心したわ」

「うん、確かに根性はある」

ミリーも本気で、同意している。

不遇なる女家庭教師は、反発ばかりしていた不良生徒たちの信頼を、思わぬところから得ることに成功したようである。

「わかった。する。だから入れる！ おまえの身体は俺のだ！」

勇んだロシエは、いきり立つ逸物を持って、ジャクリーンの膣穴に添えた。そのまま力を入れて腰を落とそうとしたところに、ミリーが止める。

「ロシエ、ちよつと待った」

「なんだ!？」

ここに至つての制止にムツときたが、一応律儀に止まる。

「前から不思議に思っていたんだよね。先生は、ロシエにオマ○コを舐めさせたのに、本番はやらなかった。なんで？」

「……」

「オマ○コ舐めさせたら普通はするでしょ、セックス」

ミリーに同意を求められたデイジィは、戸惑いながらも頷く。

「うん、あたしなら我慢できない」

「でしょ。なんで先生は我慢できたのか？」

ミリーは意味ありげに、ジャクリーンの耳元で囁く。

「もしかして、先生、処女？」

「……っ！」

びくっ！

もっとも触れられたくない話題に、金縁眼鏡の奥で、青い瞳が見開かれる。

そこにデイジイの爆笑が浴びせられた。

「いや、ないない。この歳で処女なんてとんでもないシコメぐらいだよ。女としてあり得ないって」

ケラケラと笑いながら親友の推理を否定するデイジイを横目に、ミリーはダラダラと冷汗をかいている恩師を見る。

「先生どうなんですか？」

「ま、まままままままさまさか、わわわわたくしはもう大人の女ですよ」

動揺もあらわなジャクリンは顔を背けた。そのさまにデイジイは笑いをひっ込める。

「ウソ、マジ？」

「マジっばい」

デイジイとミリーは顔を見合わせる。

「ロシエ、入れる前に処女検査しよ、処女検査♪」

「はあ……、なんだよ、それ？」

「だって、この歳で処女なんて真冬の蝶より希少だよ。ほんとかどうか確かめてみたいじ

やん」

ディジイの剣幕に、ロシエは圧倒される。

いままさに入れようとしていたわけで、いまさら処女だろうと非処女だろうと、どっちでもいいのだが、側近の女たちは妙に盛り上がりつつしまっている。

「仕方ねえな。少しだけだぞ」

「いやああああ、それだけは、それだけはやめてええええええ!!!」

半狂乱になって叫ぶジャクリーンの願いもむなしく、ロシエは一旦逸物を引いた。

するとディジイとミリーは嬉々として、恩師の陰唇を剥けるだけ剥き上げる。

「処女検査♪ 処女検査♪」

ディジイに至っては鼻歌まで歌っている。

かくして残酷なる少女たちは、ジャクリーンの膣穴を思いつきり広げた拳句、魔法光を近づけて、肉奥まで覗き込む。

「うわ、やっぱあった。これ処女膜だよ。間違いない」

「ロシエ、見て見て。これって処女膜だよね」

「ああ」

ディジイに促されて、ロシエも覗き込んだ。

ディジイとミリーの使用前、使用後をしつかり観察したことで、処女膜というものがどういうものか、ロシエは見知っている。

確かにジャクリーンの膺穴には処女膜があるようだ。小さな穴がいくつもある、篩状処女膜といわれる形だろう。

「いままで散々、大人のふりして、実は膜付きだったんだ」

「その歳で、処女って恥ずかしい♪」

ドモス地方は性的におおらかなところがあり、二十歳を過ぎても処女の女などほとんどいない。

デイジィとミリーは口々に侮りの言葉を浴びせる。

「処女のくせに、ロシエにいろいろ教えるようになしたかぶりしていたんだ。こういうのを僭上の沙汰って言うんだよね」

デイジィは本気でそう思っているらしく、大真面目に発言する。

必死に隠しておきたかった秘密を、小娘たちに暴かれ、なおかつ嘲笑されたとき、ジャクリンの中で何かが切れた。

顔が真っ赤で、目には涙が浮かんでいる。

さすがのロシエも少し哀れに思えてきた。

「もういいだろ。入れるぞ」

事を進めようとするロシエを、ミリーが押しとどめる。

「ちよつと待って。ほら、先生、おねだりしなさいよ」

「なぜ、わたくしがそのようなことを……」

ロシエがやりたいというから、仕方なくやらせてやるのに、おねだりするいわれなどない。

ムツとするジャクリーンにミリーは、指を立てて指摘する。

「だって、先生、その歳で処女なんだよ。普通の男はもう気持ち悪がつてよつてこないつて」

「うん、二十歳過ぎて処女なんて、病気持ちだよね」

教え子たちの情け容赦ない発言の数々に、ジャクリーンは頬を引き攣らせる。

しかもミリーは不意に表情を改めた。いささか真剣な表情でアドバイスする。

「売れ残り女のカビの生えたオマ○コだよ。そんなのに入りたいなんて物好きロシエぐらいしかいないよ」

「そうそう、先生みたいに可愛げのない女、いまロシエにやられなかつたら、一生相手にしてくれる男なんていないね」

「ディジーまで本気でそう思っているようだ。」

「くう……」

ジャクリーンは才媛と呼ばれてきた女である。いままで自分の美貌に劣等感を持ったことなどない。

言い寄ってくる男などけんもほろろに追い払い、ひたすら勉学に励んできた。

だから、自分さえその気になれば、男なんていくらでも手玉に取る自信があったのだ。

それを小娘たちから真剣に心配されて、さすがに不安になってきた。

「さあ、ロシエにおねだりしなさい」

教え子たちの物笑いにされ、女としてのプライドを木端微塵に破壊されたジャクリーンは、すっかり自信を喪失してしまったのか、弱々しく口を開く。

「で、殿下、入れてください……」

「全然ダメ。もっと思いっきり淫らに」

ミリーはクールな口調だが、そこはかとないう悦が滲んでいる。

（ミリーのやつ楽しそうだな）

どうもサドとしての血に目覚めようとしているようである。

ディジイのほうは相変わらず能天気だ。

「そうそう、ロシエのおちんちんをオマ○コに入れられるのって、すごい気持ちいいよ。一度入れられたら、癖になっちゃう」

ミリーはなにやら、ジャクリーンの耳元で囁く。

ジャクリーンは屈辱に頬を引き攣らせながらも、ロシエの顔を見つめながら口を開く。

「殿下、わたくしのカビの生えた汚いオマ○コでよろしかったら、どうか使用してください」

おそらくミリーにそう言えと言われた言葉を、復唱しただけなのだろうが、同時に剥きだしになっている膣穴から、ドブドブと液体が溢れ、肛門まで濡れていた。

どうやら、被虐の悦びに目覚めてしまったようだ。

その物欲しそうな膺穴を前に、ロシエは我慢の限界になった。

「よし、入れるぞ」

もう側近の女たちが何を言っただって止まらない。

自分よりも一回りも年上の女の両足を豪快に持ち上げたロシエは、いきり立った逸物の切っ先を、グッチョグッチョの活火山にも似た膺穴に添えた。

ロシエとしては、いままで常に上位者のように振る舞っていたジャクリーンを、思いつき男らしく犯してみたかったのだ。

「ああ……殿下」

女としての自信を木端微塵に碎かれた女は、恍惚とした牝の表情で見上げてくる。

いつも傲慢で偉そうだった女家庭教師の被虐に満ちた姿に、否応なく興奮を高めたロシエは、一気に腰を落とした。

ブツツ!

少年の硬く尖った肉槍の切っ先は、確かに牝肉を切り裂いた。

「うおおお」

さすがに大人の女の膺洞である。ディジイやミリーよりも広い。しかし、ぎゅつと締まってくるから、緩いなどとは微塵も感じない。

「これがジャクリーンのおマ○コか……」

女に溺れている、というのはどこか格好悪いと感じたロシエは、表面的にはクールに呟いた。

しかし、内心では大興奮である。

(うお、すげえ、オマ○コ温かくて気持ちいい♪ ちんちん溶けそう♪)

歓喜したロシエは、暴発しないように逸物に気合いを入れつつ、思いつきり力の限り腰を上下させた。

ズボ、ズボズボズボ……。

少年の逸物が、大人の女の体内に入っては出て、入っては出てを繰り返し、熱い飛沫があたりに飛び散る。

「ひい、そんないきなり、激しく、されては……あん、あん、あん……」

破瓜の痛みのあるジャクリーンは慌てて慈悲を乞うたが、もうロシエは止まらなかった。いや、止められなかった。

(うわ、すげえおっぱい、踊っている♪)

ガツ！ ガツ！ ガツ！

一突きすることに、ジャクリーンの双乳が跳ねるのだ。

自分が腰を叩き込むたびに、豊かな乳房が変形して踊る。その魅惑的すぎる光景は、少年を野獣に変えるには十分であった。

「ああ、硬い、硬いおちんぼが、殿下のおちんぼが、わたくしのオマ○コを、オマ○コを

かき混ぜている。ああ、すごい。お腹の中までかき混ぜられる……ひい」
もっともつと淫らに乱れさせたいと思い、肉槍を振るう。

残念ながらロシエのお子様サイズの逸物では、膣奥を突くというわけにはいかなかったが、変わりに女の恥骨を破壊しようと欲するかのようになり、荒々しくぶつける。

「ひい、ひい、ひい、ひい」

ジャクリーンはなんとも哀れな牝声を上げて悶える。

単純に膣洞の気持ちよさ、というだけでは、ディジィたちと甲乙をつけられないが、ことおっぱいの誘惑という意味では、ジャクリーンの圧勝である。

「ああ、激しい、激しすぎる。ああ、もう、ダメ、頭の中が真っ白で、ああ、壊れる。壊れちゃう！ オマ○コが、理性が、壊れちゃう！」

破瓜の最中だというのに、若く活きのいい牡ならでは、破壊的なまでの荒々しい腰使いに晒されて、ジャクリーンは涎を噴き、涙を流しながら悩乱した。

（すげえ、色っぽい。あ、もう、もう……でる）

陵辱される女家庭教師の被虐美に魅せられた。

逸物が蕩ける。最近、少しは経験を積んだといっても、所詮は十代の敏感な逸物である。熱く煮えたるような美人の体内で、暴れ回っていたのでは、そうそう長持ちできるはずがない。

「うっ」

呻き声を上げたロシエは、逸物を思いつき押し込んだ状態で荒腰を止めた。

ドビュツッ！ ドビュツッ！ ドビュツッ！

「ああ、入って、入ってくる。ああ、こんなにいっぱい、熱いものが、殿下の精液が、ひ
いいいいい!!!」

上になっていたロシエの身体が痙攣し、それがそのままジャクリーンの身体へと移って
いく。

(気持ちいい。こいつのイキ顔ってすげえエロい)

心行くまで射精したロシエは、小さくなった逸物を引っこ抜き、見得を切る。

「どうだ。思い知ったか。おまえは俺のものだからな」

「は、はい……」

小娘たちに憫笑されながらの初体験。野心に燃えた気高き女家庭教師のプライドは完全に崩壊させられていた。

V字開脚させられているジャクリーンの股の間から、とろとろと赤い血の混じった白濁液が溢れ返る。

その光景を見下ろしながら、牡としての征服感に浸っているロシエに、ディジイとミリ
ーが抱きついてくる。

「ロシエ、次はあたしだよ♪」

「うちも、もう我慢できない♪」



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ？



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル！

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう！
かなり過激なライトノベル！

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※「二次元ドリームノベルズ」は18歳未満の方は購入できません

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル！

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラブ！

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの公式サイトにて！

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



あなたのキモチイをお手伝い!

キルタイムのアダルトコミック誌!

業界唯一! エロラブ&エロコミック満載!!

二次元 **ドリームマガジン**
ED DREAM MAGAZINE

対魔忍アサギ3
高浜太郎 著・Anime Ellith
不良っ娘エロバトル!
ぼんかラブ!
歌麿

奇数月の特集 **アナル責め**

偶数月 **17日発売**

KTC特製 **スポーツオール発売決定!**

二次元 **ドリームマガジン** ED DREAM MAGAZINE

魔法、催眠、性転換...不思議Hコミック誌!

COMIC **UNREAL**
UNREAL
06 2013
price 680yen
祝・7周年!

Hisasi
エロコミックの
ドモセションサク

不思議の海へ
飛び込んで

奇数月 **12日発売**

KTCといえば闘うヒロインアンソロ!

対魔忍アサギ3
高浜太郎 著・Anime Ellith
不良っ娘エロバトル!
ぼんかラブ!
歌麿

奇数月 **12日発売**

下旬発売 **ヒロインが**
ちまくるアンソロジー!

メガミ クラシス
MEGAMI CRISIS

COMIC **UNREAL** UNREAL

メガミ クラシス MEGAMI CRISIS

詳しくはKTCの公式サイトにて! キルタイム

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!! ※いずれも18歳未満の方は購入できません。